

固定遊具での遊びの面白さとリスクを考える ～すべり台を中心に～

企画趣旨・話題提供	箕輪潤子（武蔵野大学）
司会	大澤洋美（東京成徳短期大学）
話題提供	栗原啓祥（認定こども園 清心幼稚園） 園田修一（日向なないろ保育園）
指定討論	馬場耕一郎（おおわだ保育園世田谷豪徳寺） 久留島太郎（植草学園短期大学）

<企画趣旨>

保育施設は子どもたちが成長する場であり、命の危険や重篤な怪我があってはならず、国・地方自治体でもリスクマネジメントの取り組みがすすめられている。その一方で、園庭の遊具は危険性そのものが遊びの価値として内在し、危険を完全には除去できないという特殊性があることが指摘されている（野田ほか、2018）。

固定遊具のリスクに遊びの価値が内在する中で、保育者は「リスク」と「子どもが感じる遊びの面白さ・育ちの可能性」の間で揺れながら、日々子どもの遊びを見守り援助をしていると考えられる。では、保育者はどのような価値判断に基づいて、固定遊具での遊びを見守り、援助し、止めるのだろうか。その判断の背景には、保育者の保育観やリスク認識、子どもの姿についての認識に加え、園の考え方やルール、環境の特徴などが存在していると考えられる。

本シンポジウムでは、固定遊具における遊びの価値とリスクに関する保育者の判断とその背景を、話題提供者、フロアと共に探りたい。

<話題提供>

「固定遊具での遊びの面白さとリスクを考える」

認定こども園 清心幼稚園 栗原啓祥

本園は、群馬県前橋市にある幼保連携型認定こども園である。形状や構造が異なるすべり台が3基ある。一つ目は2004（平成16）年に園舎新築の際、避難器具として設置した螺旋型すべり台で、園舎の2階、及び大型複合遊具の構築物と接続している。先が見えにくく最もスピードが出やすいので多様な遊び場になっている。2015（平成27）年の幼保連携型認定こども園移行後、のぼり口を何度か改修し、のぼりにくくした経緯がある。二つ目は直線型のローラー滑り台で、大

型複合遊具下に位置する。道具や身体を駆使して遊ぶ姿がよく見られる。三つ目は認定こども園に移行した際、別棟に新設した1歳～2歳用の波型すべり台である。2歳児以降、母屋のすべり台と出会うことを想定して設置した。

本シンポジウムのテーマ「どのような価値判断に基づいて、固定遊具での遊びを見守り、援助し、止めるか」について、保育者と改めて振り返った。本園は多様な遊びを通して育つ、関わるなどを大切にする一方、大型複合遊具にオモチャを持っていかない以外の基準が少ない。そうした背景もあり、保育者から確認する>対応が多く聞かれた。例えば、「保護者（寛容さ）によって、子どもとの距離（見守り）や声のかけ方が変わる」と言う声があったように、保護者との確認や理解も判断基準の一つである。しかし、「その子が危ないと思ったら、いくん？って声かけちゃう」のように、総じてその子どもと関わりながらリスクを調整しようと試みていた。一呼吸おくことで、子ども自身で自分の意思を再確認したり、保育者が見守っていることを認識できたりするようにしていた。また、「楽しさが悪ふざけだったら危なくなる」と言うように、遊びの進行中に子どもと相談・確認したり、子どもが「手伝って」と助けを求めてきた場合は、手立てを一緒に考えたり、納得感が得られたりするよう時間をかけて援助していた。その一方、「らせんすべり台で、下にいる子（2歳、3歳）がペシャンコになりそうな時、ちょちょちょって止めたくなる」「2歳だとケガしながら覚えていく子もいる」「5歳児同士だと止めない。見ていても回避して体幹ができていく」と言うように、遊びが進行している場合、早急な判断も必要になってくる。そのため保育者は、「普段の歩き方、掴み方とか見てる」「どういう子？って他の先生にも確認して

る」「あの子がどうなるか想像して考えてる」など、子どもの育ちや身体をよく見て日々情報収集し、「子どもによって変わる」対応に備えていた。当日も参加者の皆さまと共に考え合いたい。

「子どもたちが、子どもとして、子どもらしくいられるために」 園田修一(日向なないろ保育園)

なないろ保育園には、大型のアスレチックをはじめ、乳児から幼児までたくさんの様々な経験のできる環境を用意しています。今回のテーマであるすべり台も夫々の年齢に応じたすべり台風なものを含めると、屋外に4基、室内のすべり台も2,3基(非固定遊具)あります。夏場になるとウォータースライダーも準備します。もちろん、そのほかの砂場やブランコ、雲梯、鉄棒、シーソーなどいろいろな遊具を用意しています。それぞれの遊具に面白さがあり、リスクがあります。

子どもたちは一生懸命に、試行錯誤しながら夫々の『楽しい』を見つけようとします。そのことが、固定遊具の役割であり、醍醐味、面白さであると考えます。そこに大人の考える(すべり台は滑って遊ぶものというような)固定概念を押し付けると、順番やルールを決めないといけなくなるのでしょうか。

また、見守る保育者側からすると、複数の子どもがやってくれば、保育者一人では何かあった時の対応が難しくなり、結局ルールを設けたり、注意を促す声掛けが増えることとなります。ルールよりも子どもたちの『楽しい』を尊重したい保育者としては、悩ましいところです。なないろ保育園では、子どもたちにルールを考えてもらったり、いろいろと遊びの選択肢を充実させたり、それこそ試行錯誤しながら取り組んでいるところです。

乳幼児期は、神様の与えた特別な時間だと思えます。ケガをしにくい身体、ケガをしてもすぐに良くなる力(回復力)を備えている時期です。

すべり台等の遊具に限らず、園の中にはいろいろなところにリスクが潜っていますが、この時期にたくさんの経験がなかったら、本来この時期に身につくべき力が育たないように感じます。保育者にはリスクにばかり目を向けず、こどもたちの育ちに目を向けて保育を行ってほしいと思います。

「滑り台での遊びにおけるリスクの認識と判断」

箕輪潤子(武蔵野大学)

固定遊具での遊びに含まれるリスクの中に、遊びの面白さや子どもの成長の可能性が含まれているとすれ

ば、保育者は何をリスクとして、何を子どもにとっての面白さや成長の可能性として認識しているのだろうか。また、リスクと遊びの面白さや成長の可能性を認識し、その間で揺れるなかで、保育者は「止める」と「見守る」をどのように判断しているのだろうか。

筆者らは野間教育研究所幼児教育部会で、「滑り台における遊びの面白さとリスク」について、様々な角度から研究してきた。今回のシンポジウムでは、保育者と学生が滑り台での遊びについてどのようなリスクがあると捉え、リスクのある遊びをどのような時に止めると判断するかについて、質問紙調査を行い、その回答を分析した結果を報告する。

ある園の滑り台で幼児が遊んでいる写真を提示し、「どこにリスクがあると感じるか」を尋ねたところ、学生は子どもの行動(リスクの原因)や行動によって生じる事象をリスクとして捉えていた。特に、「下に子どもがいるので、上から滑ってきた子どもとぶつかる」など、写真から確認できる行動の延長にリスクがあると認識していた。また、リスクについては多くの学生が「怪我をする」と記述していたが、怪我の箇所や程度について詳しく記載している学生は少なかった。一方で、保育者は子どもの行動や行動によって生じる事象に加え、「足に擦り傷を負う」など、身体の中の箇所にとどの程度の怪我をする可能性があるかについても回答する場面が多かった。さらに、視覚的に確認できる子どもの行動に加え、「下にいる子どもは縁に手をかけているので避けるか立ち上がる」といった、写真では確認できない子どもの行動を予測して記述する場合も見られた。

リスクのある遊びをどのような状況になったら止めると判断するかについて、学生の場合は「怪我の可能性がある場合」「危険な場合」「ぶつかりそうになったら」など、具体的な子どもの姿や状況を想定していない記述がほとんどであった。それに対して保育者は、「子どもたちがふざけ始めたら、いったん落ち着かせるために止める」「やる気が見られない時、意欲がなさそうな時は止める」など、具体的な状況や子どもの様子を想定した記述が多く見られた。

本シンポジウムでも、登壇者や参加者と共に、保育者の滑り台での遊びにおけるリスクの認識と判断について考えたい。